

前田耕作先生のご逝去を悼んで

山内 和也*

Obituary of Professor Kosaku MAEDA

Kazuya YAMAUCHI

2022年10月11日、アフガニスタン、パーミヤーン遺跡研究の第1人者である前田耕作先生がご逝去された。享年89であった。溢れる情熱と「知」への探究心、人との出会いを楽しみ、大事にする人柄で、会う人を楽しませ、誰にも愛される人であった。ときには詩人でもあり、ときには研究者でもあり、幅広い知識と学術的な研究、そして自らの経験を基に、つねに前田先生は人に語りかけ、ともに悩み、ともに道を探す人でもあった。

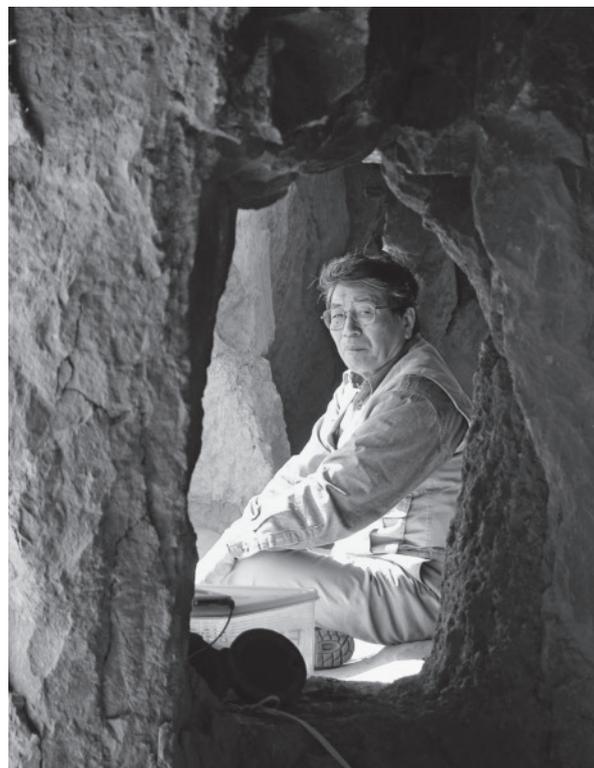
前田耕作先生は、1933年（昭和8年）2月1日、三重県亀山に生まれ、1960年には名古屋大学文学部哲学科美学美術史を卒業された。その後、第1次名古屋大学アフガニスタン学術調査（1964年）、第2次名古屋大学アフガニスタン学術調査（1969年）の際にアフガニスタン、そしてパーミヤーンに出会い、その魅力に取り憑かれたようである。第1次調査では、N洞でこれまで知られていなかった壁画を発見した。ある時、先生にN洞の名称の由来を尋ねたところ、「それは名古屋大学の頭文字のNだよ」と笑ってお答えになったことが思い出される。その後もパーミヤーンに足を運び、成城大学によるパーミヤーン調査にも参加している（1973年、1977年）。

パーミヤーン研究の傍ら、1971年には和光大学人文学部助教授に就任され、1975年には和光大学人文学部教授となり、和光大学人文学部長（1995年）、和光大学表現学部長（2000年）、学校法人和光学園の理事や評議員を歴任され、大学運営にも多大な功績を残された。2003年には和光大学教授を退職し、和光大学名誉教授の称号を授与されている。私が前田先生に出会ったのも和光大学にご在籍のときであった。イランから帰国し、就職先もない私に和光大学の非常勤講師をご紹介くださったのは1996年のことで、前田先生とのお付き合いはそれからである。授業が終わり、研究室に何うと、ひとしきり話を終えたあと、鶴川駅前の居酒屋へと繰り出し、さまざまなお話をしてくださった。いまでも楽しい思い出である。

前田先生が大学での教育や研究、運営に勤しんでいた間、アフガニスタンでは大きな変化があった。それは、1979年のソ連軍によるアフガニスタン侵攻である。その後、2001年に至るまで長く厳しい内戦や紛

争が続くことになり、前田先生はアフガニスタンに行くことができなくなってしまった。その間、前田先生は和光大学パロースタン学術調査（第1～4次：1989～1990年、1997～1998年）を実施し、アフガニスタンを忘れず、またその周辺地域の文化や歴史を探るための研究を行っていた。

2001年のパーミヤーンの東西大仏の爆破は、文化遺産に対する蛮行として世界に大きな衝撃を与えただけでなく、前田先生、そして私にとっても大きな転機となった。破壊されたパーミヤーンの文化遺産を調査し、保存するという大きなプロジェクトが開始されたからである。内戦後、ようやくにして前田先生がパーミヤーンを訪れることができたのは、2002年9月のことであった。そのときに派遣された日本・ユネスコ合同調査団の一員として、前田先生、宮治先生、そして私が参加した。前田先生は、25年余りを経て、ふたたびパーミヤーンの地に立つことができたのである。



2006年9月パーミヤーンN(a)窟にて（撮影：梶井基充）

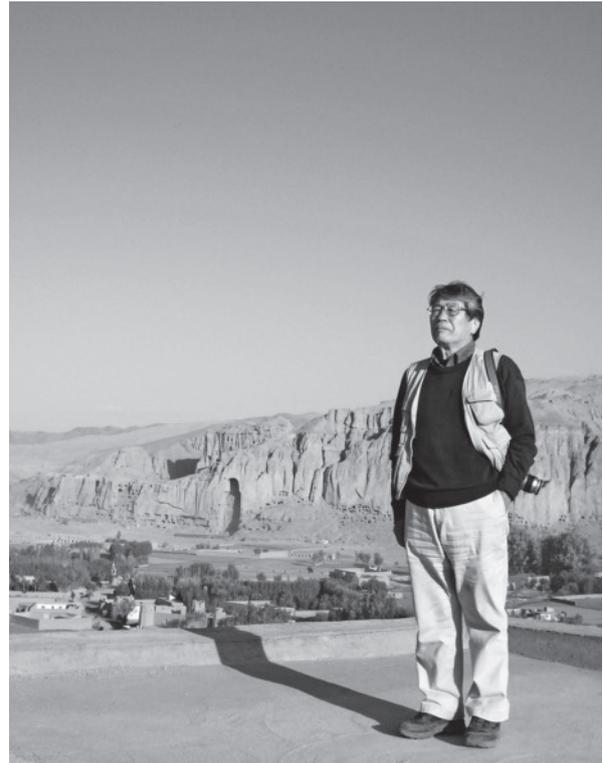
*帝京大学文化財研究所

爆破された大仏、そして失われた壁画を前にして、前田先生は深くため息をついていたのを憶えている。破壊前の大仏や壁画を見たことがなかった私とは比べ物にならないほどの深い悲しみ抱いていたのだと思う。かつて調査を行なった石窟を見て回るたびに、「ここもやられている」「ここにあった壁画もなくなっている」とつぶやいていた。その一方で、破壊されたパーミヤーンの文化遺産を守ろうという強い思いと意志がふつふつと芽生えていたのであろう。パーミヤーンの文化遺産の保護に対するそれからの前田先生の思いと行動は力強いものであった。

前田先生は、「パーミヤーン遺跡保存に関するワーキンググループ」のメンバーとして、2002年にミュンヘンで開催された第1回以来、欠かさず会議に参加し、パーミヤーン遺跡の保護を強く訴え、日本の活動の後押しに力を注がれた。前田先生の熱意と人柄は、つねに人を引き寄せ、会議の取りまとめ役として重要かつ大きな役割を果たした。また、東京文化財研究所が中心として実施した「パーミヤーン遺跡保存事業」にも参加し、パーミヤーンを良く知らない年若い研究者を指導するとともに、日本、ドイツ、イタリア、フランスからなる国際的なチームとの調整にも意を尽くされた。さらには、保存に携わる専門家を鼓舞しつつ、新たな発見を目指して、日々、自らが率先して石窟をめぐるしていた。

パーミヤーンでの前田先生との思い出は枚挙にいとまがないほどたくさんある。パーミヤーンの現地宿舎では、多くの時間を前田先生と過ごすことになった。隊員の構成や人数の都合上、多くの場合、前田先生と私が同室になり、それこそ寝食を共にしたということになる。パーミヤーンの秋の訪れは早く、10月には室内が凍えるようになる。人間が吐く息に含まれる水分で、窓ガラスの内側が凍り付いてしまうこともあった。寒い時期には、凍えないように薪ストーブをおいた大部屋で、みんなで雑魚寝をしたこともあったし、1人がシャワーを我慢して浴び、そのぬくもりが消えないうちに続けてもう1人がシャワー室に飛び込むということもあった。前田先生は70歳という年齢にもかかわらず、体調も崩さず、いつも健啖家で、パーミヤーンでの生活を楽しみ、研究していたことは、私たちにとって大きな驚きでもあった。

前田先生は、現地、つまりパーミヤーンにおいてのみならず、日本でも積極的にアフガニスタンとパーミヤーンの支援のためにご尽力された。日本によるパーミヤーン遺跡保存事業の後押しをしてくださった文化庁や外務省との連絡も絶やさず、つねに新しい情報を提供し、良い関係を築いていた。日本がこれほど長期間にわたってパーミヤーン遺跡保存事業を継続してきたのには、このような前田先生の日々の行動の賜物で



2006年10月パーミヤーンにて（撮影：谷口陽子）

あったのだとを感じる。

その活動はメディアにも取り上げられ、2006年にはNHKの「クローズアップ現代 —パーミヤーン発掘の大仏は一」に出演したが、一般の皆さんに対する丁寧な解説が印象的であった。また、2006年には『黄金の都パーミヤーン—ハイビジョンデジタルでよみがえる：三蔵法師が見た巨大仏』（ジェネオンエンタテインメント）の監修もつとめ、パーミヤーン、そして日本の活動についての広報に大きな役割を果たした。

2013年以降、治安の悪化のために日本人専門家がパーミヤーンで活動することはできなくなってしまったが、そのなかにもあっても、前田先生はその歩みを止めなかった。「黄金のアフガニスタン—守りぬかれたシルクロードの秘宝」展の開催とアフガニスタン流出文化財の返還（2016年）、「素心 パーミヤーン大仏天井壁画」展（2016年）、「みろく—終わりの彼方 弥勒の世界—」展（2021年）は前田先生のご尽力と熱意があってこそ実現したものと言えよう。前田先生は、「パーミヤーンに行けなくとも、できることはやる」「何かできることはないのか」とよく話をしていた。日本の皆さんにアフガニスタン、そしてパーミヤーンを伝えていこうという前田先生の思いの現れであったのだと思う。

また、前田先生は、アフガニスタンでの活動の経験を活かし、文化遺産国際協力コンソーシアムの副会長として、日本の文化遺産分野における国際貢献にも積

極的に取り組まれた。紛争や災害、開発によって破壊や消滅の危機にある文化遺産をどのように保護するのか、日本はどのような貢献をすべきなのか、副会長として心を砕いておいでであり、その発言はこれからの日本の協力や貢献にとって重要かつ有意義なものであった。

前田先生の学術・研究分野における業績や貢献も多方面にわたっており、浅学の私ではどのようにご紹介すれば良いのか分からないほどである。名古屋大学では文学部哲学科美学美術史にご在籍していたこともあり、バシュラールやエリアーデ、デュメジルの書を読み、神話、言語にご興味があったように見受けられる。その後、アフガニスタン、パーミヤーンの調査をきっかけに、アフガニスタンや中央アジアの美術史や文化史へと傾倒していったようである。いずれにしてもその背後にあるのは、ギリシア・ローマ古典に対する深い造形であり、「知」への探究心であり、「知」への渴望であったように思われる。末尾に、主要な業績を挙げておく。

前田先生と私の思い出として浮かぶのは、鶯谷や新橋の居酒屋での酒を酌み交わしながらの場面である。「いま、何ができるのか」、「これから何ができるのか」、「これから何をすれば進むのか」、前田先生の話はいつも前向きで、将来を見据えたものであった。パーミヤーン遺跡の保存や調査・研究は、その前田先生の熱意と思いを針路として、道を見失うことなくこれまで続けてきたのだとしみじみ感じている。混迷するアフガニスタンではあるが、いつか必ずパーミヤーンに戻れる日が来ることと思う。私たちは、アフガニスタン、そしてパーミヤーンの文化遺産を愛し、アフガニスタンの平和を心から願っていた前田先生の思いを胸にふたたび一步一步進んでいくことになる。

前田先生、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

[著書]

- ・『巨像の風景—インド古道に立つ大仏たち—』中公新書、1986年
- ・『バクトリア王国の興亡—ヘレニズムと仏教の交流の原点』第三文明社（レグルス文庫）、1992年（ちくま学芸文庫、2019年）

- ・『宗祖ゾロアスター』ちくま新書、1997年（ちくま学芸文庫、2003年）
- ・『アフガニスタンの仏教遺跡—バーミヤン』晶文社、2002年
- ・『アジアの原像—歴史はヘロドトスとともに』NHKブックス、2003年
- ・『玄奘三蔵、シルクロードを行く』岩波新書、2010年
- ・『アフガニスタンを想う—往還半世紀』明石書店、2010年
- ・『パラムナード—知の痕跡を求めて』せりか書房、2014年

[共編著等]

- ・前田耕作・田辺勝美編『世界美術大全集—東洋編—第15巻—中央アジア』小学館、1999年
- ・前田耕作・山根 聡共著『アフガニスタン史』河出書房新社、2002年
- ・前田耕作著・越前 隆写真『写真集—バーミヤーン遺跡』毎日新聞社、2002年
- ・前田耕作・山内和也編著『アフガニスタンを知るための70章』、明石書店、2021年
- ・シルクロード検定実行員会編『読む事典—シルクロードの世界』NHK出版、2019年

[監修等]

- ・エミール・パンヴェニスト著、前田耕作監修、蔵持不三也他訳『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集1』言叢社、1986年
- ・エミール・パンヴェニスト著、前田耕作監修、蔵持不三也他訳『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集2』言叢社、1987年
- ・フランシーヌ・ティツソ著、前田耕作監修、前田龍彦・佐野満里子訳『図説ガンダーラ：異文化交流地域の生活と風俗』東京美術、1993年
- ・前田耕作監修・関根正男編『日本・アフガニスタン関係全史』明石書店、2006年

[翻訳等]

- ・ガストン・バシュラール著、前田耕作訳『火の精神分析』せりか書房、1969年
- ・ミルチャ・エリアーデ著、前田耕作訳、堀 一郎監修『イメージとシンボル』せりか叢書、1971年
- ・エミール・パンヴェニスト、ゲラルド・ニョリ著、前田耕作編・監訳『ゾロアスター教論考』平凡社東洋文庫、1996年
- ・ジョルジュ・デュメジル著、丸山 静、前田耕作共編『デュメジル・コレクション』、ちくま学芸文庫（全4冊）、2001年
- ・ヴィレム・フォーヘルサング著、前田耕作・山内和也共監訳『アフガニスタンの歴史と文化』明石書店、2005年
- ・サイエド・アスカル・ムーサヴィー著、前田耕作・山内和也共監訳『アフガニスタンのハザール人—迫害を超え歴史の未来をひらく民』明石書店、2011年

